今昔、小野ノ篁ト云ケル人、愛宕寺ヲ、造テ、其ノ寺ノ料ニ、鑄師ヲ以テ鐘ヲ鑄サセタリケルニ、鑄師ガ云ク、此ノ鐘ヲバ、搥ク人モ无クテ、十二時ニ鳴サムト爲ル也、其レヲ此ク鑄テ後、土ニ掘埋テ三年可レ令有キナリ、今日ヨリ始メテ三年ニ滿テラン日ノ、其ノ明ム日可二掘出一キ也、其レヲ或ハ日ヲ不レ令足ズ、或ハ日ヲ餘テ掘開タラムニハ、然カ搥ク人モ無クテ、十二時ニ鳴ル事ハ不レ可有ズ、而ル構ヘヲシタル也ト云テ、鑄師ハ返リ去ニケリ、然テ土ニ掘埋テケルニ、其ノ後別當ニテ有ケル法師、二年ヲ過テ、三年ト云フニ未ダ其ノ日ニモ不レ至ザリケルニ、否不二待得一ズシテ、心モトナカリケルマヽニ、云フ甲斐無ク掘開テケリ、然レバ搥ク人モ無クテ、十二時ニ鳴ル事ハ無テ、只有ル鐘ニテ有ル也ケリ、鑄師ノ云ケム樣ニ、其ノ日掘出シタラマシカバ、搥ク人モ無クテ、十二時ニ鳴リナマシ、然鳴マシカバ、鐘ノ音ノ聞及バム所ニハ、時ヲモ慥ニ知リ、微妙カラマシ、極ク口惜シキ事シタル別當也トナム、其ノ時ノ人云ヒ謗リケル、然レバ騷シク物念ジ不レ爲ザラム人ハ、必ズ此ク弊キ也、心愚ニテ不信ナルガ至ス所也、世ノ人此ヲ聞テ、努々不信ナラム事ヲバ可レ止シトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔唐六典二十七太子家令寺〕太子率更寺令一人從四品上○中略

北齊詹事率更令、有二丞功曹主簿領二中盾署一、令丞各一人、掌二周衞禁防漏刻鐘鼓一、隋、率更寺令一人、皇朝因レ之、龍朔二年改爲二司更大夫一、咸亨元年復レ舊、

〔燕石雜志五下〕鐘聲追考○中略

中葉より佛說を甘じて、人々洪鐘を鑄て、これを寺門に懸もて、祖先の冥福を祈ること多かり、よりて世俗は、候鐘を僧坊にて執行する事とのみ思ふめり、凡都會の地、今江戸なる芝、石町、本所、市谷にて撞く鐘の如く、これを都城の四方に置て、候を遠近に知らし給ふ事は、天朝の古記錄にいまだ見もかよはず、これも又有がたき事なるべし、